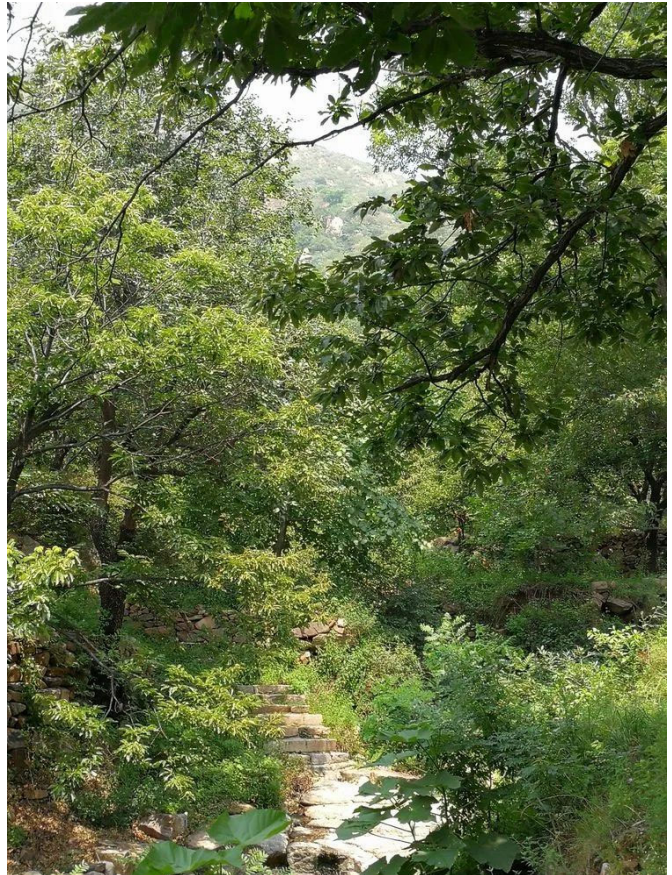


### 看板に偽りあり？

商品の産地が一種のブランドとして確立している場合、その偽装表示が時折話題になっている。しかし、公正な表示が法令で義務づけられる以前には、大らかな産地の誤解が、いつしか社会的に定着した例が見出される。

身近には、「天津甘栗」がある。甘栗の材料は、中国語の「板栗」、標準和名で「シナグリ」(*Castanea mollissima*) という、栗の一種である。小粒ながら甘みが強く、渋皮が簡単に剥け、大陸では古くから珍重された。山東省済南市の山中にある独路村には、唐代から続く「唐朝板栗園」が現存する。【写真 1】樹齢 500 年以上の板栗だけでも、600 本以上残っているそうである。板栗の日本への導入は、比較的新しい。1887 年、農学博士津田仙は、清国を視察して板栗の苗 2 本を持ち帰った。その 1 本は、会津坂下町で今や樹高約 30 メートルの大木に成長し、「天津栗津田一号」と命名された。焼栗としての導入は、1910 年、華僑の李金章が浅草で始めた記録がある。麦芽糖を混ぜた小砂利を鍋で加熱し、板栗を投入する「糖炒栗子」、すなわち「甘栗」は、中国伝統の製法である。麦芽糖は、栗のツヤを出す工夫で、味には影響しない。1914 年、北沢重蔵らが大陸から板栗の輸入を開始し、翌年「北沢洋行」が天津に事務所を構え、本格的に板栗を買い付けた。かくして板栗は、日本で「天津甘栗」の名で宣伝されるようになった。しかし天津は、横浜と同様の港湾都市であり、栗園はない。もっとも 1973 年には、板栗の大産地が合併し天津市最北の区になったから、甘栗の一部は「天津産」と称して良いだろう。



【写真 1】 唐朝板栗園

余談にわたるが、日本ではなぜ、板栗そのものを栽培しなかったのかという疑問が生ずる。江戸時代以前には、日本と中国の往来は限定されていたから、栗まで手が回らなかったと推測される。しかし、日本人は、大陸から有用な物を導入することにかけて、古代より抜け目なかったのである。万葉集にも詠まれている梅は、大陸からの移入植物である。竹は、縄文時代の遺跡から竹製品が発見されており、日本に自生していた。しかし、竹は種類が多く、ほとんどの日本原産種は細い女竹、つまりメダケ属 (*Pleiolobus*) の竹である。工芸や食用に供される真竹、つまりマダケ属 (*Phyllostachys*) の竹は、いまや日本政府によって、有用であるが生態系を荒らしかねない「産業管理外来種」に指定されて

いる。マダケ属のうち、マダケ (*Phyllostachys bambusoides*) の渡来は、『竹取物語』が成立した 9-10 世紀より前と推定されている。これには、「かぐや姫」が入っていた竹は、マダケではないとの異論がある。とにかく、マダケの渡来は梅と同じくらい古いのであろう。一方、マダケ属のモウソウチク (*Phyllostachys pubescens*) は、1728 年または 1736 年、清国から琉球を経て薩摩藩に移入されたと、比較的明確である。

板栗を日本で栽培せず、生栗の輸入に頼ったのは、大陸で安価かつ大量に買い付けが可能であった実際的理由に加え、虫害の問題が存在した。クリタマバチ (*Dryocosmus kuriphilus*) は、クリの新芽に虫コブを作って成長を阻害する害虫である。従来日本にはいなかったが、1941 年、岡山県で発見された。旧軍兵士が、河北省から持ち帰ったクリの苗に混入していたと推定されている。おそらく、外地で板栗の味を覚え、除隊後に栽培しようと考えたのだろう。クリタマバチの天敵は国内に存在せず、クリタマバチは板栗の導入を妨げただけでなく、1960 年代には全国に拡散し、在来のクリにも大被害を与えた。日本にはもともと、在来のクリに虫コブを作るタマバチの仲間があり、クリマモリオナガコバチ (*Torymus beneficus*) が天敵であった。ところが、大陸から侵入したクリタマバチの虫コブは大きく、産卵管の短いクリマモリオナガコバチは、クリタマバチに寄生できなかった。日中国交正常化後、中国国内の情報がもたらされるようになり、かの地の板栗栽培では、クリタマバチが問題視されていないと判明した。1975 年の現地調査を経て、クリタマバチの天敵、チュウゴクオナガコバチ (*Torymus sinensis*) が見出された。日中専門家の協力により、1979 年にはチュウゴクオナガコバチの生体が、日本に持ち帰られた。1982 年、つくば市の果樹研究所で、チュウゴクオナガコバチを放つ実験が行われた。10 年後、クリタマバチによる被害率は 1%にまで激減した。チュウゴクオナガコバチは自力で分布域を拡大し、1990 年代半ば、国内におけるクリタマバチは、低密度に抑えられるに至った。これは、「生物的防除」が成功を収めた例として記録されている。虫害の懸念が払拭され、板栗の本格導入の条件が整った。岡山県森林研究所では、板栗から選抜した「岡山一号」(遼寧省原産)、「岡山三号」(湖南省原産)などの品種を、「岡山甘栗」ブランドで普及に努めている。

### トルコで採れないトルコ石

「天津甘栗」に似たような例では、「トルコ石」がある。トルコ石 (ターコイズ) は、昔からペルシア産が最高の品質を誇る。現在では、中国やアメリカでもトルコ石が採掘されるが、ペルシア産の奥ゆかしい青に及ぶものではない。ペルシアで産出された石が、オスマン帝国経由で欧州にもたらされ、「トルコ石」として有名になった。トルコには、トルコ石の鉱山はない。

私は 2001 年から 2 年間、宝飾加工を地場産業とする甲府で暮らした。山梨県には、もともと水晶を産する山があり、印鑑などの加工品が作られた。戦時中、無線機の主要部品である水晶の薄板が必要とされ、手先の器用な人たちは、水晶削りに動員された。戦後、その技術を生かし、輸入した原石を研磨する産業に発展した。私は、個人的な来客があると、当時甲府駅北口にあった「宝石博物館」に案内し、隣接する研磨業者の職場を見学していた。研磨師の店では、宝石について若干の耳学問をした。ここの主人は、戦時中の水晶削りから、宝飾加工の道に入った人である。レコード盤のように回転する研磨機に原

石を押し当て、指先の加減だけで精巧な多面体を削り出す、驚くべき技術の持ち主であった。耳学問といっても、相当な時間的余裕を必要とした。主人が店にいる場合、まずは二階の応接室に通される。そこで主人の四方山話に、小一時間付き合うことになる。一段落すると、眼の前の展示ケースから、水晶玉などの加工品を手渡してくれ、こういう物はどうかと言う。すかさず、「先月お邪魔した時は、インペリアル・トパーズの話が途中になりました」と水を向けると、ようやく、「そうだった、それでは下の座敷に来なさい」と別室に案内される。一階の敷地奥に狭い和室があり、大きな金庫が据えてあった。金庫の中には、マッチ箱大のガラス蓋付きケースに、一粒ずつ収められた研磨済み貴石が、多数保管されている。貴石と称するのは、アメジストやガーネット、アクアマリンなど、ほどほどの価格帯の品物を専門にしているからで、特別高価な種類は扱っていない。その座敷に落ち着くと、主人は金庫から珍奇な石が入った小箱を取り出し、畳の上に並べ始める。そして、連れてきた来客の列車の時間が迫るまで、滔々と宝石の説明をしてくれる。別に、何も買わなくても構わないのである。

2003年夏、私は甲府からテヘランに転勤することになった。早速、イラン産「トルコ石」を見たいと思った。ところが、大バザールに軒を連ねる宝石店に行くと、店主は「これは中国産、こっちはアリゾナ、アメリカ産だ」とこともなげに言う。見事な色であったが、トルコ石の表面には微細な小穴が無数にあり、簡単に染色可能である。店主は、「まず石の裏側を見なさい。ひっかくと元の色が出る」と、わざわざ鉄の棒で傷をつけ、示してくれる。そして、「この石はどうです、中まで綺麗な色でしょう」と誘惑する。遠来の客に対する、最大級のサービスに聞こえる。しかし、良質のトルコ石を研磨した際の粉末を集め、接着剤と混合して固める「練り物」という手口があり、片時も油断は許されない。

ちなみに、貴金属の場合、砥石のような試金石にこすりつけ、その色からある程度純度を知ることは可能である。映画などでは、真贋や純度を知るため、金貨を嚙むシーンがある。【写真2】フランス銀行マナス史料室長によれば、欧州諸王朝は、フローレンスが1252



年に製造を始めた純金のフローリン金貨に倣っていたが、フランスのフィリップ四世が1290年、純金と22金の金貨二種類を発行したことから混乱が生じ、ディドロが『百科全書』で22金は「硬い」金貨であると解説するなど、硬さで純度が知れるとの俗説が生じたのではないかと推測している。マナス氏は、品位の異なる模造金貨を作り、実際に嚙ってみて純度の判別を試みたが、判断できないと結論を下した。オリンピックの受賞者が、メダルを嚙むことがあるの

【写真2】渡された硬貨を嚙む給仕  
は、俗説に従って真贋を確認しているのだろう。いずれにしても、一流選手や政治家に相応しい所作ではない。もっとも、金メダルといえども、「優勝者には銀台金張り（またはメッキ）のメダル」（オリンピック憲章第5章4節規則70付属細則2-1）と定められているから、本気で嚙ると、銀の地金が露わになってしまう。

イランで最高品質のトルコ石が採掘されるのは、イラン第二の都市マシュハドより、西



へ約 115 キロメートルに位置するネイシャール産の鉱山である。イランには、他にダームガンやケルマーンにもトルコ石の鉱山はあるが、品質はネイシャール産に及ばない、トルコ石の品質分類には、伝統的な分類法と、現代の分類法がある。伝統的な分類法は、1892 年、ストリーターがロンドンで刊行した概説書『貴石と宝石：歴史・産地・特徴』に採録されているほか、今でも、イランの宝石商や海外のイラン出身業者によって踏襲されている。それによると、トルコ石は三等級に分けられる。上級品は、「アングシュタリー」、文字通りには「指輪用」の石である。これは、宝石級の石で、色は冴えわたった青であり、英語でマトリックスと呼ばれる黒い網目状の不純物は、最も少ない。中級品は、「パールハーネ」、すなわち「在庫用」と称される。これは、さらに四等級に分けられ、ストリーターによれば、パールハーネの最上級はアングシュタリーと共に、欧州に送られていた。下級品は、「アラビー」、つまり「アラブ用」とされた。イラン人から見た「アラブ」とは、地理的に近い湾岸地域の遊牧民である。彼らは、安物のトルコ石を、護符などの装身具に用いたという。

現代では、これら経験に基づく伝統的な分類法に加え、科学的な分類法が開発されている。色が悪かったり、もろい性質の原石は、研磨に先立ち「安定化」と称される、樹脂を染み込ませる処理によって、見かけを改善させる。トルコ石の場合、実に 90-95 パーセントの原石は、液浸による「改善処理」（エンハンスメント）を経たものである。日本の消費者はあまり問わないが、他の種類の宝石にも、通常、様々な手法による「改善処理」が施されている。有名な例として、サファイヤやルビーの色を改善する「熱処理」、エメラルドの透明度を改善する「液浸処理」がある。1 カラット未満のダイヤモンドは、今のところ、処理不要な原石の供給が足りている。科学的な宝石の鑑定・鑑別では、加工が研磨だけの「天然石」か、何らかの「改善処理」を受けた「処理石」かの判定が、重要なポイントである。国際市場で、「真剣な」取引の対象とされる宝石は、「天然石」に限定される。我が国の商慣習では、「人造」でない石は、「処理石」も含めて「天然」と表示される。日本の宝石商は、石より夢を売る商売なのである。国際的基準で勝負する日本の業者がないのではないが、物の分かった超富裕層に顧客が局限されるリスクに直面している。もちろん海外でも、大衆消費社会に対応し、「処理石」に話術の衣を着せて普及させるマーケットが主流であり、外国で買えば良いというものではない。トルコ石の現代的分類法では、色彩や不純物をはじめ、「安定化」あるいは「染色」の有無など、多数の項目が検査の対象となる。最上級と分類される石は、全体の 1%程度に絞られる。イラン国内で、キャビアや最高級ペルシア絨毯にお眼にかかる機会が少ないのと同様、最上級トルコ石の所在は、トルコでもイランでもなく、欧米の一流ディーラーに聞いた方が早いかも知れない。

## 宝探しの旅

トルコ石にまつわる知恵がついてくるに従い、店頭で品定めする楽しみは、減少してしまう。代わりに興味が湧いたのは、イラン中央銀行地下の「宝石博物館」であった。所蔵品は、イラン革命政権がパフラヴィー朝から引き継いだ財宝である。その中心は、ペルシアの地にアフシャール朝を興したナーディル・シャーが、1739 年、インドの支配王朝ムガル帝国のデリーに攻め入って獲得した戦利品であり、世界屈指の質と量を誇っている。あるコーナーでは、いくつもの大皿に大量のルビーが盛られており、アメ玉の量り売りを

思わせる。【写真 3】 著名な宝石の一つは、「デリヤーイエ・ヌール」（光の海）と命名された、182 カラットのピンク・ダイヤモンドである。【写真 4】 この宝石と双璧をなすのは、現在、イギリス王室の儀式用宝飾品の一部である、「クーヘ・ヌール」（光の山）と呼ばれるダイヤモンドである。「デリヤーイエ・ヌール」と「クーヘ・ヌール」は、共にインド産で、ムガル帝室の「孔雀の玉座」に嵌め込まれていた。ペルシアのナーディル・シャーは、玉座ごと二つのダイヤモンドを持ち帰った。



【写真 3】 イラン宝石博物館のルビー

「デリヤーイエ・ヌール」が、ペルシアの歴代王朝に伝わったのに対し、「クーヘ・ヌール」は、ナーディル・シャーの孫からアフガニスタンの支配者アフマド・シャー・ドゥーツラーニーに譲られるなど転変の末、パンジャブ州を併合したイギリスの手に渡った。元々 191 カラットあったとされる「クーヘ・ヌール」は再研磨され、108 カラットあまりに縮小した。これは、宝石研磨の歴史に残る惨事であった。



【写真 4】 デリヤーイエ・ヌール

古来有名なダイヤモンドの産地はインドで、サファイアやルビーなどの色石も、産地はアジア地域に集中していた。宝石が大きな結晶に成長するには、岩石が高温高压で変成作用を受ける特殊な環境が必要であり、造山活動の活発な地域に鉱脈が偏るのである。18 世紀には、ブラジルでダイヤモンド鉱山が発見され、19 世紀からアフリカで採掘が始まった。しかしそれ以前、ダイヤモンドは、インドの独占状態であった。宝石に魅せられた欧州の王侯は、インドからダイヤモンドや色石を取り寄せようとした。例外はエメラルドで、現在のコロンビアに位置するアンデス山脈のムーソ鉱山から、「液浸処理」の不要な最高級の原石が採掘される。この地域は、1537 年にスペイン人に征服され、ムーソのエメラルドは、欧州のみならず、イスラーム世界にもたらされるようになった。イスタンブールのトプカプ宮殿に保管されているオスマン帝室の宝飾品は、イランの宝石博物館所蔵品に比肩する世界的な財宝である。緑はイスラームを象徴する色であり、オスマン帝国のスルターンは、緑したたる大粒のエメラルドを愛好した。【写真 5】 これらは、ムーソから運ばれたものである。イランの宝石博物館にも、大量のエメラルドが蓄えられている。

アに位置するアンデス山脈のムーソ鉱山から、「液浸処理」の不要な最高級の原石が採掘される。この地域は、1537 年にスペイン人に征服され、ムーソのエメラルドは、欧州のみならず、イスラーム世界にもたらされるようになった。イスタンブールのトプカプ宮殿に保管されているオスマン帝室の宝飾品は、イランの宝石博物館所蔵品に比肩する世界的な財宝である。緑はイスラームを象徴する色であり、オスマン帝国のスルターンは、緑したたる大粒のエメラルドを愛好した。【写真 5】 これらは、ムーソから運ばれたものである。イランの宝石博物館にも、大量のエメラルドが蓄えられている。

欧州から東方へ宝石の買い付けに出かけた商人は、王侯の庇護を得て、ある種の使節のように待遇された。さもなくば、大金と宝石を持ち歩く外国人であるだけに、道中の安全確保が難しかっただろう。実際、追い剥ぎに襲われた者もいる。インドに旅行した有名な欧州人宝石商には、タヴェルニエ（1605-1689）とシャルダン（1643-1713）があった。タヴェルニエは、生涯 6 回に及ぶ東方への大旅行を行い、ム



【写真 5】 トプカプ宮殿のエメラルド

ガル皇帝シャー・ジャハーン（1626-1657）の宮廷を訪れ、玉座を飾る板状のピンク・ダイヤモンドを記録に残している。【写真 6】「デリヤーイエ・ヌール」は、このダイヤモンドから研磨されたと推定されている。また彼は、「タヴェルニエ・ブルー」と名付けられることになる、115 カラットあまりのブルー・ダイヤモンドを買い付け、ルイ十四世に売却した。シャルダンは、その著作が和訳されるなど、日本でも詳しく紹介されている。彼は、サファヴィー朝ペルシア帝国の宮廷に招かれ、アッバース二世の依頼でインドへ宝石を買い付けに行った。これら宝石商たちは、商売だけでなく、オスマン帝国やペルシア帝国、ムガル帝国での見聞を旅行記として出版し、名声を博した。



【写真 6】 タヴェルニエ

### アラブと宝石学

宝石学は、鉱物学の一部門として誕生した。宝石は、一般的な鉱物と異なり、種類や品質の判定に大金が懸かっており、いつの時代も正確な知識が切望されている。インドまでダイヤモンドを買い付けに行き、水晶を持ち帰ったのでは、話にならない。現在伝わっている宝石学最古の文献は、ギリシアのテオフラストゥス（紀元前 371 頃-紀元前 287 頃）に帰せられる、『鉱石概説』の断片である。テオフラストゥスは、アリストテレスの後を継ぎ、リュケイオンの学頭に就任した人物である。『鉱石概説』は、アリストテレスの自然学に基礎を置き、ローマ帝国の大プリニウス（紀元 23-79）が著した『博物誌』に継承された。『鉱石概説』と『博物誌』は、古典古代における宝石学の出発点となった。東方キリスト教世界における教父の一人、エピファニオス（315 頃-403）は、神が預言者アロンの衣装を飾るよう命じた 12 個の宝石について詮索する、『十二宝石論』を著した。これらの作品



は、宝石に関する知識の集成である反面、実証研究ではなく、伝聞・伝説に依拠していた。ローマ帝国の版図から出土した古代の宝飾品は、ガーネット、アメジスト、カルセドニーなど、今では「貴石」ないしは「半宝石」の扱いを受ける石を使用していた。エジプト東部から採掘されたエメラルドを除き、ダイヤモンド、ルビー、サファイヤは名称が知られただけで、出土例は皆無か、例外的であった。

東洋でも同様の状況で、「金剛石」は仏典にもあるが、天竺に行かない限り、ダイヤモンドを眼にする機会はなかったであろう。我が国では、旧石器時代よりガラス質の黒曜石が、利器のみならず装身具として利用され、特に信州中央部の八ヶ岳周辺からは、高品質の原石が採掘されていた。古墳時代には、翡翠や瑪瑙などを用いた玉文化が最盛期を迎えた。ところが、奈良時代以降、宝玉加工の伝統は急速に廃れ、糸魚川の翡翠産地も、1938年に再発見されるまで、忘れられてしまっていた。一方、中国には、硬玉・軟玉や石印材を加工する長い歴史がある。清朝時代、ムガル帝国や東南アジアから、ごく少数のルビーなどがもたらされた。また清朝では、トルマリンが「碧璽」の名で知られるようになった。トルマリンは、1554年、スペイン人征服者がブラジルで発見した、比較的新しい宝石である。緑色のトルマリンは、欧州でエメラルドと勘違いされ、別種の石であると認識されたのは、1793年のことである。清朝における「碧璽」は、透明度の高いものより、氷裂を思わせる複雑な模様を内包する結晶が喜ばれた。20世紀初頭、ピンク色の碧璽を愛好した西太后の命により、カリフォルニア州からトルマリン原石が大量に輸入された。1902-1910年の輸入量は120トンに達し、清朝崩壊と共に鉱山は不況に陥った。これら原石は、宮廷工匠の手で、伝統的な宝飾品に加工された。西太后の宦官であった李蓮英（1848-1911）は、『愛月軒筆記』を口述し、西太后の副葬品とされた翡翠などの夥しい宝玉類を詳細に記録した。1928年、軍閥の孫殿英は、西太后の陵墓を盗掘した。西太后の口腔から発見された「夜明珠」は回収され、孫殿英から蒋介石夫人・宋美齡に贈られた。宋美齡は、「夜明珠」を履物の装飾にしたといい、後にロックフェラー家に売却した。日本に留学した章鴻釗（1877-1951）は、1921年、『石雅』を出版し、中国の旧文献が伝説とない交ぜに扱った、石に関する知見を近代鉱物学に再編した。

中世ヨーロッパでは、『石品吟詠』の著者であるレンヌ司教マルボディウス（1035頃-1123）、トマス・アキナスの師であり、『鉱物論』を著したアルベルトゥス・マグヌス（1200頃-1280）が出現したが、古典古代の宝石学を大きく変えることはなかった。カミルス・レオナルドゥス（1479-1514頃）が、ヴァレンティーノ公チェーザレ・ボルジアに献呈した『宝石明鑑』は、総論と各論の二部構成である。総論では、石の様々な性質に着目し、実証研究への道を開くと共に、宝石の価値を高く見せようとする偽計について解説している。各論においては200種もの宝石を立項したが、内容面では伝聞が多く、各種の石の神秘的な効用を説き、錬金術・占星術から脱していなかった。それでも1750年に英訳されるなど、長く利用された。ゲオルギウス・アグリコラ（1494-1555）は、『鉱物学教本』を著し、鉱物学の父と讃えられた。彼は、実物を知っている石については、硬度の調査などに基づき、より正確な記述を行った。知らない石については、大プリニウスの『博物誌』を参照した。博物学者コンラート・ゲスナー（1516-1565）は、『鉱物論集』を編纂した。これは、エピファニオスの『十二宝石論』などに、ゲスナー本人の論文を合わせた書物で、宝石の分類に産地の別を加味した点が画期的であった。アンセルムス・デ

・ポート（1550 頃-1632）の『宝石鉱物誌』は、鉱物の硬度を 5 段階に分け、あるいは鉱物の組成と性質の関係を追求し、さらには同一種の宝石において、旧大陸産と新大陸産の違いを研究するなど、この時代の宝石学の到達点を示している。デ・ポートは、宝石の効用については懐疑的であったが、落馬した際、持っていたトルコ石が身代わりに割れ、助かったと書き残している。一方、テオフラストウスの『鉱石概説』は、1599 年にイタリア語訳、1746 年に英ギリシア対訳版が出版されるなど、実用書の地位を保っていた。東方に旅したタヴェルニエやシャルダンも、商売上の経験に加え、このあたりの書物の知識を備えていたのであろう。

イスラーム世界では、9 世紀に入るとアッバース朝による翻訳事業が軌道に乗り、アリストテレス、テオフラストウス、大プリニウスの著作は、次々とアラビア語訳された。多角的な才能を示したキンディー（801 頃-873）は、ギリシア・ローマの宝石学を吸収し、『宝石とその模造品』を著した。この書物は失われてしまったが、碩学ビールニー（973-1048）の『宝石学大全』に引用されている。【写真 7】『宝石学大全』は、長文の序説と本文から成る。序説は、善悪判断の基準は何かを考察する、本格的な倫理学説である。本文は、宝石および金属についての各論である。何ゆえに、この序説と本文が組み合わせられているのか、不思議な感じもする。人の美德は、地の宝石に比するほど稀少なのであろう。あるいは、宝石や貴金属を扱う人間は、高潔でなければならず、『宝石学大全』を悪用してはならないとの戒めかも知れない。各論の記述は、従来の宝石学のスタイルを踏襲し、文献の引用が多い。しかし、アラビア語の伝承に依拠するだけに、新たな展望を示している。ビールニーは中央アジアに生まれ、ペルシア文化圏で宮廷天文学者として活動し、インドにも数年暮らした。実物の宝石を見る機会には、中世欧州人より、はるかに恵まれていたであろう。



【写真 7】『宝石学大全』

9 世紀初頭から 18 世紀末までの千年間、宝石学は欧州とイスラーム世界で、並行して発達した。その前半では、アラビア語を媒体とする宝石学の水準は、欧州を引き離していた。それを示すのは、北アフリカを舞台に活動したティーファーシー（1184-1253）の『宝石に関する考察の精華』である。ルネサンスを契機として、イスラーム世界と欧州の差は縮まり始めた。千年間の後半においても、オスマン帝国やペルシア諸王朝が強大な時代は、宝石学は依然、東高西低であった。『宝石に関する考察の精華』は、1818 年にイタリア語訳がアラビア語本文を付して出版された。欧州では、古代ギリシアの宝石学がなお現役であり、アラブの宝石学は驚きをもって迎えられたことだろう。

『宝石に関する考察の精華』は、テオフラストウスらギリシア・ローマの文献に加え、ビールニーに至るアラブの宝石学の成果に立脚し、ティーファーシー自身による観察や産地調査に基づいて、25 種類の宝石について解説している。これらには、鉱物のみならず、真珠や珊瑚のような、生物由来の物質が含まれる。試みに、『宝石に関する考察の精



華』を、1502年にヴェニスで出版されたレオナルドゥスの『宝石明鑑』と比較してみよう。『宝石に関する考察の精華』の「トルコ石」の章を見ると、冒頭に「トルコ石は、その鉱山から立ち上る銅の煙により生成される、銅属の石である」と定義されている。煙起源かはともかくとして、トルコ石が銅とアルミニウムを主成分とする磷酸塩鉱物であるとする、現代の知識に一步近づいている。銅が含まれなければ、青に発色しないという意味では、「銅属の石」は本質を突いている。次に、トルコ石の産地を「ニーサーブール山岳」と正確に特定する。そして、最上の石は「澄んだ青の色彩が輝き、純度・光沢は最高、色調は均一である」と、現代の評価基準に照らして遜色なく描写する。また、トルコ石が汚れに染まりやすく、触れれば石の美点が損なわれると注意する。これも、適切な指摘である。アリストテレスからアレキサンダー大王に宛てた書簡を引用し、携帯する者は暗殺から免れ、刺客の眼を眩ますとの理由から、ペルシアの王や高官はこの石を身に帯びていると、王者たる者の心得を伝えている。さらに価格については、同じ重さの指輪石であっても、品質に従い価格が変わり、良い石は一個1ディナールであろうが、西洋の王侯が競い合って値をつり上げれば、10ディナールに達するだろうと、親身な助言を与えている。これに対し、レオナルドゥスの『宝石明鑑』は、トルコ石を「白に近い黄色の石」であり、「国名（トルコ）にちなんでいる」と記述し、実物の知見に欠けるようである。また、トルコ石は「馬に乗っている者が身につけていれば、その者は疲労することなく、いかなる事故でも無事であるとして、乗馬に役立つとの俗説がある」「携帯する者は、外敵による危害から護られるといわれる」と伝え、護符としての効用を強調している。



『宝石に関する考察の精華』に戻り、「ダイヤモンド」の章に眼を転じてみる。ダイヤモンドの産地について、ユーハンナー・ブン・マーサワイヒを引用し、「インドの、誰も下まで降りることのない深い谷にある」と伝える。ダイヤモンドの歴史的産地は、インドのハイデラバード州東部、ゴールコンダ地方であり、漂砂鉱床という、風化した岩石の中から川に流されたダイヤモンドが集まる場所があった。ダイヤモンドの性質に関しては、「もし、鉄床の上に置き、鋼鉄の槌で打てば、壊れることはなく、鉄床または槌の表面にめり込む」と、恐るべき実証精神を発露している。レオナルドゥスの『宝石明鑑』は、ダイヤモンドの産地を、インド、アラビア、シリアなど6か所であるとする。インド産の産出量は一番少ない

【写真 8】 黒太子のルビー  
が、品質は最高であり、金槌の打撃に耐えると記述する。レオナルドゥスは、「私は多くが、金槌で叩くと壊れてしまうのを見た」と証言した。インド産以外の石は、ダイヤモンドではなかったのだろう。

さらに、「スピネル」(尖晶石)の項目を捜してみる。スピネルは、ルビーとサファイヤの総称であるコランダムに成分や性質が近い宝石である。そのため、鮮紅色のスピネルは、肉眼でルビーと区別することが難しく、欧州では、1783年にフランス人鉱物学者がスピネルとルビーの違いを発見するまで、両者は混同されていた。英国王権の象徴である王冠の主石は、170カラットの「黒太子のルビー」である。【写真8】14世紀にイングランドへもたらされた宝石であり、実際はスピネルであった。ヴィクトリア女王のネックレスに嵌め込まれた352カラットの「ティムールのルビー」も、同様にスピネルである。ルビーとスピネルが区別されるようになると、スピネルの方が産出量が少なく、従って稀少であるにもかかわらず、知名度が低い理由だけで、「貧者のルビー」などと不当に貶められた。現在でも、スピネルの相場は、同等のルビーの約10分の1である。『宝石に関する考察の精華』は、「ルビー」(ヤークート)とは別に、「バルハシュ」の名で、スピネルについて記録している。そして、「バルハシュは、バラフシャー、ペルシア人のいうバダフシャーよりもたらされる」と、名前の由来と産地を特定している。「バダフシャー」は、アフガニスタン北東部の地名であり、11世紀よりスピネルの産地として知られた。「黒太子のルビー」は、バダフシャー地方で発見されたと伝わる。アラブは、欧州人より600年以上前から、ルビーとスピネルの違いを認識していた。ティーファースーは、大プリニウスを引用し、バルハシュはルビーの一種ではあるが、ルビーになる途中の石であると解説している。そして、「バルハシュには三種類あり、赤いサソリ石、それから緑と黄の石がある」と続ける。「サソリ石」とは、生物のサソリの殻の色ではなく、火星のように赤い蠍座の主星を連想させる、「アンタレス・スピネル」なのだろう。価格については、色や輝きの良い赤色のバルハシュは、「ルビーの価値の半分」と言明した。ルビーとの違いを知らない者に売れば、倍になるわけである。欧州人は、バダフシャー産のスピネルを「バラス・ルビー」、あるいは「バラシウス」と呼んだ。レオナルドゥスの『宝石明鑑』は、「紫あるいは薔薇色」の石である「バラシウス」を立項する。おそらく、赤い「バラシウス」は、ルビーの扱いなのであろう。「バラシウス」は、「友人間の喧嘩を和解させ、人体に健康な状態をもたらす」という効用を挙げている。

やがて、自然科学が発展すると同時に、宝石産地を含む地域を欧州諸国が植民地化し、確実な情報源に変える過程を経て、宝石学の中心は西に移った。19世紀に入ると、それまで王侯貴族が独占していた宝石を、市民富裕層のみならず、豊かになり始めた中産階級が欲しがらるようになった。新鉱山の開発は、需要の拡大に追いつかなかった。二級品以下の原石を市場に投入しようと、「改善処理」の技術が進歩した。20世紀には、人造石を作る技術が生まれた。旧来の宝石コレクターは、消費財化した「処理石」や「人造石」の氾濫から身を守るため、宝石学の力に頼ることになった。現在、世界の主要な宝石鑑定・鑑別機関は、私企業が運営している。日進月歩の技術革新に対応し、検査機器に多額の設備投資を行う能力のある機関は、欧米の数社しかない。落札価格が人々を驚かせるような、重要な宝石の競売に際しては、これらが発行する証明書が不可欠とされる。庶民に手の届く宝石にも、立派な証明書が付されていることはよくあるが、その作成は、石の価値に相応しい機関が請負っているのである。